

○「はらまち九条の会ホームページ」をどうぞ。http://www.haramachi9jo.net
 または「はらまち九条の会」で開くことができます。ご意見もお寄せください。



九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No. 162

2011(平成23)年 2月18日(金)発行

<旧満州国の「引揚げ船」はすべてアメリカの軍艦LST(戦車揚陸艦)で行われました>

■1945年8月15日、日本が敗戦した時海外にいた日本人は約660万人。しかし日本政府は敗戦の前日、すべて海外にいた日本人を「現地に定着」という無責任な方針を発表。■旧満州国にいた日本人は155万人で、敗戦でいち早く関東軍幹部は逃亡し、日本国に見捨てられ取り残された居留民は日本に帰国するため、命がけの逃避行を強いられます。日本には船はなく、満州からの引き揚げはすべてアメリカのLST(戦車揚陸艦)などで行われ、1946年5月7日から48年8月まで満州から約105万人が帰国でき、24万人が死去。

「漫画展」会場で満州時代や引き揚げの絵を見てみると、まるで自分が当時に戻ったような錯覚に陥り、二日間も通い絵に見入りました。

ダルマストーブで大豆を焼いたり
 まず戦前の食べ物話になります。大豆についての思い出があります。満州の大地では一面大豆畑が広がっていました。収穫後、畑のあちこちに大豆の殻の山ができていました。でもその山をかき分けると取り残した大豆を見つけたことができます。そこで子供たちがきそってその貴重な大豆を見つけて拾いました。一人せいせい十

1月29日「漫画展」会場で、赤塚不二夫の絵の前で話す青田さん
満州で生まれ七歳まで生活した
 私の両親は原町区出身ですが、父は旧満州国の熱河省(現在の内モンゴル自治区)の赤峰(せきほう)という都市の観象台(気象台)に勤務していました。私は昭和十三年三月十二日、その赤峰の官舎で生まれました。
 満州での生活のことも、敗戦による日本への引き揚げの様子も、本当にこの「漫画展」の一枚一枚の絵と全く同じで、同様の体験をしてきました。



© 赤塚不二夫

▲これは赤塚不二夫の引き揚げの<絵>ですが、青田さんも全く同じ姿で引き揚げました。お父さんは描かれていませんが、<絵>の左から、青田さんのお母さん(お腹に赤ちゃんがいました)、リュックにつかまっている7歳の誠之さん、1歳の弟を背負った妹さん、そして弟さん。
 ところが、引き揚げる途中、お腹の赤ちゃんは生まれてすぐに亡くなり、また同時に妹に背負われていた1歳の弟も死んでしまいます。お母さんの乳も出ず、食糧も無くてみんな栄養失調で苦しんでいて、本当に悲惨でした。
 食べ物もなく死んでいく日本人がたくさんいて、その遺体は満州の広い畑の中に掘られた大きな穴に埋められていきました。青田さんの死んだ二人の弟はお母さんの願いも通じず、離れ離れに埋葬されてしまったということです。

粒位だったと思います。そしてその大豆をダルマストーブの上に置き、焼いて食べたりしました。でも大勢の子ども達が一つのストーブの上で自分の大豆を並べ、焼いて食べるのですから一人一個しか置けず、焼けるのを待って食べるのです。ところが、ストーブが揺られて大豆がこぼれると「これはおれの大豆だ」と奪い合いをしたこともしばしばでした。
父は一時ソ連兵に連行される
 昭和二十年八月十五日、私が七歳、小学二年生の時に終戦になりました。満州国は消滅し、それから日本へ帰国

『漫画展』の絵と
 全く同じ体験をした
 南相馬市原町区大町
 青田 誠之
ただゆき

(「引き揚げ」するため、命がけの体験をすることになります。日本の敗戦とともにソ連(ロシア)軍が侵入してきて、日本人の男をシベリアの労働力にするためトラックに強制的に乗せて連れ去っていきましました。私の父もトラックに乗せられますが、そばにいた私も一緒に父について乗りました。しばらく走ってから「子供はいらない」と私はトラックから降ろされました。父のことを皆でとても心配しましたが、幸いなことになぜか父はすぐに解放され家族と合流することができ、一緒に引き揚げることになります。
引揚げの途中二人の弟が死去
 当時の私の家族は、この(赤塚不二夫の絵)と全く同じ姿で引き揚げました。父、母、私、妹、弟、そして母のお腹の中の子(弟)でしたが、引き揚げる途中で二人の弟が亡くなります。現在、その埋葬した所には大きな慰霊塔が建っているそうです。

(裏面につづく)

両親は貴重品を食糧と交換

満州は終戦前は日本人が支配していましたが、終戦後は立場が逆転し中国人が上となり日本人が支配され食料を獲得することも難しくなりました。父も職を失い、豆腐を仕入れて売っていたことも覚えていますが、引き揚げはまず収容所まで歩いて行きました。持てるだけの荷物を持って、金目の物や万年筆、墨などの貴重品は中国人に奪われてしまうので、両親は体に隠していました。父は腕時計を足にはめて、母は髪の中に指輪などを隠していました。

そして時々その貴重品を売って、乾パンなどの食料を買ったり交換したりしました。とにかく食べ物を獲得することが何より大切で大変なことでした。

「人ごみ」にさらわれた私

引き揚げの列車に乗る前、家族と逃避行でテクテク歩いていて、中国人たちが日本人の子供を連れ去っていき、いわゆる「人ごみ」が私たちを狙っていました。日本人の子供は頭が良いし、よくまじめに働いて、労働力としてもいいと思われていたそうです。

実は私も一度、「人ごみ」にさらわれたことがあります。その時、妹と弟が「お兄ちゃんをさらわれた」と騒いで教えてくれて、両親や他の日本人が奪い返してくれました。私もそのままだっていましたが、今頃私は中国に住み、日本の本当の両親探しをしていかもしれません。でも力尽きたり、子供を連れてくることが出来なくなり、本当に困っ

た日本人の親の中には、我が子でも殺してしまったり、中国人に預けたりしました。それが残留孤児ですが、今さら名を呼ぶことのできない悲しい親も相当いるような気がします。

屋根のない引き揚げ列車に乗って
この駅から乗ったのは分かりますが、この「森田拳次の引き揚げ列車の絵」と全く同じで、引き揚げ船が出る「葫蘆（コロ）島」まで列車に乗りました。



© 森田拳次

屋根のない荷物を運ぶ貨車（無蓋車）に、引き揚げの日本人がびっしりと乗っています。私たちは貨車の端っこに乗っていました。何日間かかったかはわかりません。走ったり、停車したりで、「本当にこの列車は港まで行くのかな」と不安でした。

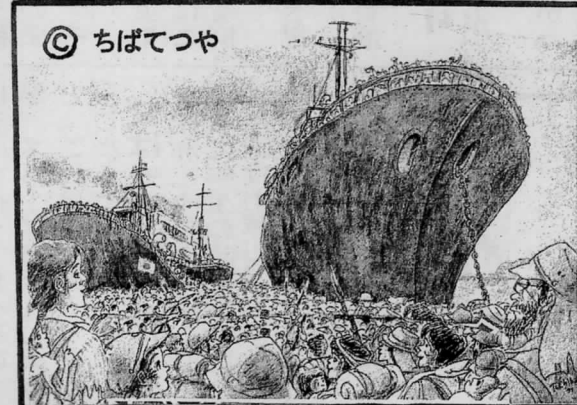
時々列車が止まり、野宿したこと、もたびた目で、火を炊いて何か食料を準備したようでした。星空が大変きれいだったことを覚えていますが、何日かかかって港の「葫蘆（コロ）島」にたどりついたので、よくわかりませんが、数ヶ月かかったような気がしますが、一緒にたどり着いた日本人は皆幽霊のような姿でした。

旧満州（中国東北部）の主な都市と引き揚げまでの道のり



青田さん一家が住んでいた赤峰

私は満州で生まれ育ち、日本に引き揚げた後、中国を訪ねたこともありません。でもこの「漫画展」を見てから、中国を訪ねて引き揚げの途中で亡くなった二人の弟を弔りたいと思うようになりました。『漫画展』は大変面白い企画で、感謝しています。



© ちばてつや

▲引揚船はすべてアメリカのLST(戦車揚陸艦)など約185隻で行われた。LSTは長さ100mもあり、船底は体育館のように広く、引揚者1,500人を収容した。

葫蘆（コロ）島から引揚船に乗る
満州の南端の港が「葫蘆（コロ）島」で、引揚船はこのへちばてつやの引揚船の絵」と全く同じで、とても大きな貨物船でした。

亡くなった小学生の姉妹のこと
私たちは船底に家族でまとまっていました。隣に両親のいない小学生の姉妹が乗っていました。しかし船の中で、飢餓のためか、一人とも死んでしまいました。口や目や鼻からウジが出ていたことを覚えていません。姉妹は白布に包まれ海葬（水葬）で海に投げられました。

日本の美しい山野に感動
そして「葫蘆（コロ）島」を出航して四日間位で佐世保港に着きました。私が生まれて初めて見る日本ですが、緑に包まれた山々とさつまいも畑も本当に美しく、大変感動しました。上陸した佐世保でお風呂に入り、頭から全身にDDTをかけられました。その後、汽車で原町に向かいました。原ノ町駅から歩いて初めて父の実家の高平まで行きました。途中月がとつてもきれいだっただけを覚えています。

弟の慰霊のため中国を訪ねたい

○これは1月28・29・30日、南相馬市中央公民館で開催の「漫画展」に入場された青田さんから、展示パネルを見ながら聞き取りした戦争体験です。○青田さんをはじめ、悲惨な引き揚げ体験をお持ちの方がたくさん会場に入場され、戦争のことを昨日のことのように話されていることに驚かされました。○終戦から66年になりますが、まだまだ戦争は終わっていない、今のうちに体験をまとめておかなければと再認識させられました。